

皆さん、こんにちは。

夏休み前の全校集会にあたり、お話をさせてもらいます。

皆さんは、「3人のレンガ職人」の話を聞いたことがあるでしょうか。

ヨーロッパの町を歩いていた旅人が、レンガを積み上げる作業をしている3人の職人に「何をしているのですか？」と尋ねたところ、3人はそれぞれ異なる答えを返すという話です。

この話の中で、1人目の職人は、「親方に言われたとおり、仕方なくレンガを積んでいるのさ。」と答えるのに対して、2人目は「レンガを積みば、金がもらえる。その金で家族を養っているのさ。」と言います。そして、3人目は、「歴史に残る偉大な大聖堂を作っているんだ。」と大きな目標を達成するために仕事をしているのだと言います。

すなわち、1人目は仕事の内容にあたるWHAT、2人目は目的を果たすための手段HOW、3人目は使命や理念であるWHYについて答えていると言うことができます。

この話は、仕事の目的を考えることが大事だというメッセージを伝えるためのエピソードとしてよく使われ、その場合、WHYを意識している人が最も高い評価を受けるのだという教訓的内容が含まれています。

日頃から、夢や目標を見据えて努力することが大事だとか、自分のためだけでなく人々の幸福に貢献することを意識しようと訴えている私としては、もちろん、皆さんにも3人目の職人のような考えを持ってほしいと思っています。

ここでは、見方を変えて、1人目の職人に注目してみたいと思います。この職人の回答からは、どのようなことが言えるでしょうか。少し時間をとりますから、近くの人と相談してみてください。

(1分)

ここで私が皆さんと共有したいポイントは、崇高な理念や壮大な夢がなくても、人はレンガを積む作業を続けることができるということです。このような能力は、人間が持つ環境適応能力の1つで、「手段への没頭」と呼ばれることがあります。皆さんの学習にあてはめると、目的や意味がないまま、あるいは、分からないまま、漫然と機械的に、「学習」という名の単純作業を行うということです。最初は熱い思いや緊張感を持って始めたことも、時間とともにその感覚が薄れ、「手段への没頭」が進むと、「目的の形骸化」という状況に陥ってしまいます。

言われたことをただ忠実に繰り返し行えばよかった時代であれば、「手段への没頭」ができる人が重宝されました。しかし、今は、一人ひとりが自分の個性や持ち味を発揮しながら知恵や意見を出し合って、組織として最適の結論を引き出すことが重要視される時代です。「手段への没頭」や「目的の形骸化」を許したままにした結果、変化を受け入れられない人や新しい発想ができない人が多くいる組織は、時代に取り残されてしまいます。

私は、高志高校において、「手段への没頭」や「目的の形骸化」が蔓延することを許してはいけないと思っています。そこで、生徒の皆さん、そして先生方には、夏休み前の節目の今、これまで「手段への没頭」や「目的の形骸化」になっていたことはないか振り返ってほしいと思います。

今やっていること、これからやろうとすることに関して、「本当に必要か?」「何のためにするのか?」と自問したり、「正しい方向に進んでいるのだろうか?」「効果や成果は出ているのだろうか?」と時折確認したりしてみてください。場合によっては、見方・考え方をあらためて、軌道修正したり引き返したりすることも必要です。

そのようにして、皆さんが、新しいやり方や新しい考え方を身につけていってくれることを期待しています。今週末からの夏休みが始まります。たくさんのチャレンジと試行錯誤を重ねながら、有意義に過ごしてください。